View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

広島大学大学院文学研究科　広島大学考古学研究室紀要　第11号、2020年、1～23頁。　考古学研究室紀要

備後北部地域における甕形土器の地域色

村 田　　晋

１．はじめに

広島県下における弥生土器の地域色研究は、主に県外、あるいは県内の河川流域を違える地域との比較に主眼を置いた比較的大きな視野から行われてきた。その成果として、弥生時代後半期には、県内でもいくつかの範囲に土器の地域色が分かれることがわかっており（加藤ほか 1985）、本稿で取り扱う県北東部の備後北部地域（以下、備後北部[(1)]）についても、「塩町式」（潮見 1964）をその代表として、周辺地域と異なる土器のあり方が指摘されて久しい。

これまでは備後北部としての土器の地域色のまとまりがたびたび強調されてきたが、近年の遺跡調査例の増加によって、地域内部における多様な土器のあり方が明らかになってきた。本稿では、特に土器地域色が顕著である第Ⅳ様式土器を対象として、備後北部内における土器の地域差を検討し、その意味するところについて考察を行うことにしたい。

２．研究の現状と課題

（１）備後北部をめぐる土器地域色研究史

本稿で対象とする備後北部は、東端部の庄原市東城町周辺を除くその大部分が、島根県江津市で日本海に注ぐ一級河川江の川の上流域に属している（第１図）。当該地域の第Ⅳ様式土器をめぐって、まずはその地域色の評価に関するものを中心に、先行研究を概観しておきたい。

備後北部の弥生土器研究は、編年的視点から始まった。当該期の土器研究は、三次市塩町遺跡の出土資料をもとに命名された「塩町式」（潮見 1964、第２・３図[(2)]）を中心に進んで

第１図　備後北部の位置

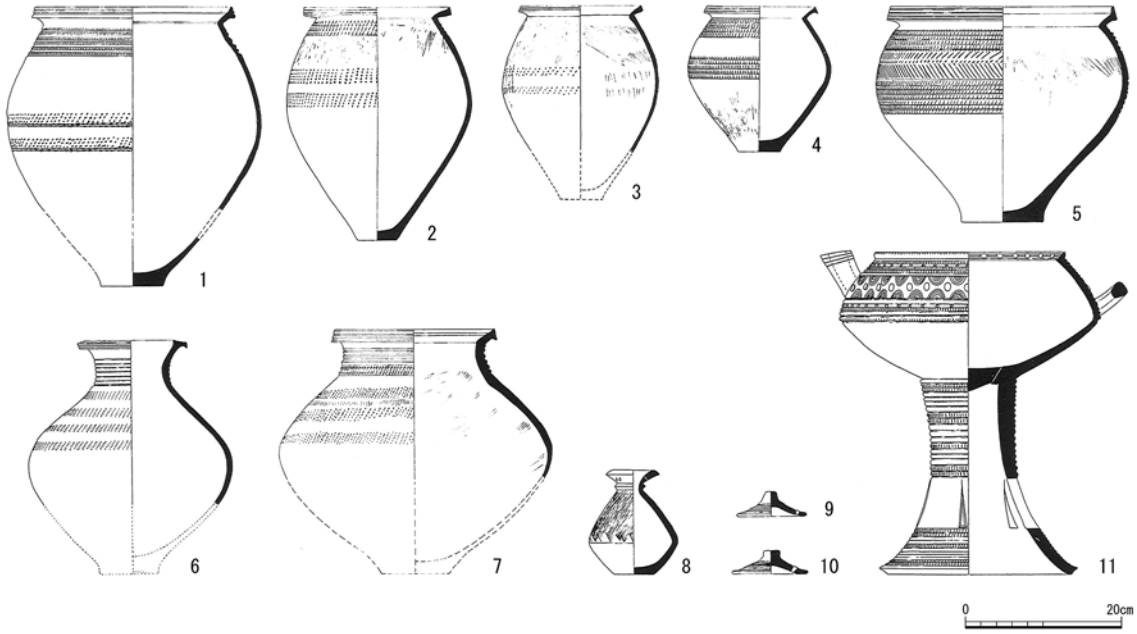
第２図　「塩町式」の特徴をもつ甕
（三次市・大谷遺跡　資料49）

きたといえる。「塩町式」命名当時は広島県下における遺跡調査例も少ない頃で、これらの土器群がもつ特徴が備後北部の地域色であるとまでは明確に言及されず、第Ⅳ様式という時期的標識としての性格が主に強調された。

その後、発掘調査例の蓄積によって広島県内各地の土器地域色が明らかとなっていき、『広島県の弥生土器』によって初の県内地域別土器編年が試みられた（加藤ほか 1985）。「塩町式」に代表される備後北部の第Ⅳ様式土器については「豊富な品種」「強い加飾性」がその特徴として取り上げられ（加藤・桑原・山田 1985）、この頃には備後北部の土器がもつ特徴が周辺地域とは異なるもの、すなわち地域色として把握されるようになったことがわかる。

1992年には二つの編年的研究の成果が発表された。妹尾周三は江の川上流域の土器の型式的特徴をもとに、三次市塩町遺跡出土土器を中心にⅠ期、庄原市和田原Ａ・Ｂ地点遺跡出土土器を中心にⅡ期を設定し、第Ⅳ様式を２期に細分する型式編年案を提示した（妹尾 1992）。また、『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』も刊行され、この時点における備後北部の土器様相が概観できる基礎文献が出来上がった（伊藤 1992）。編年が主眼であり、地域区分も旧国単位であったため、備後北部内における地域差までは扱われなかった。

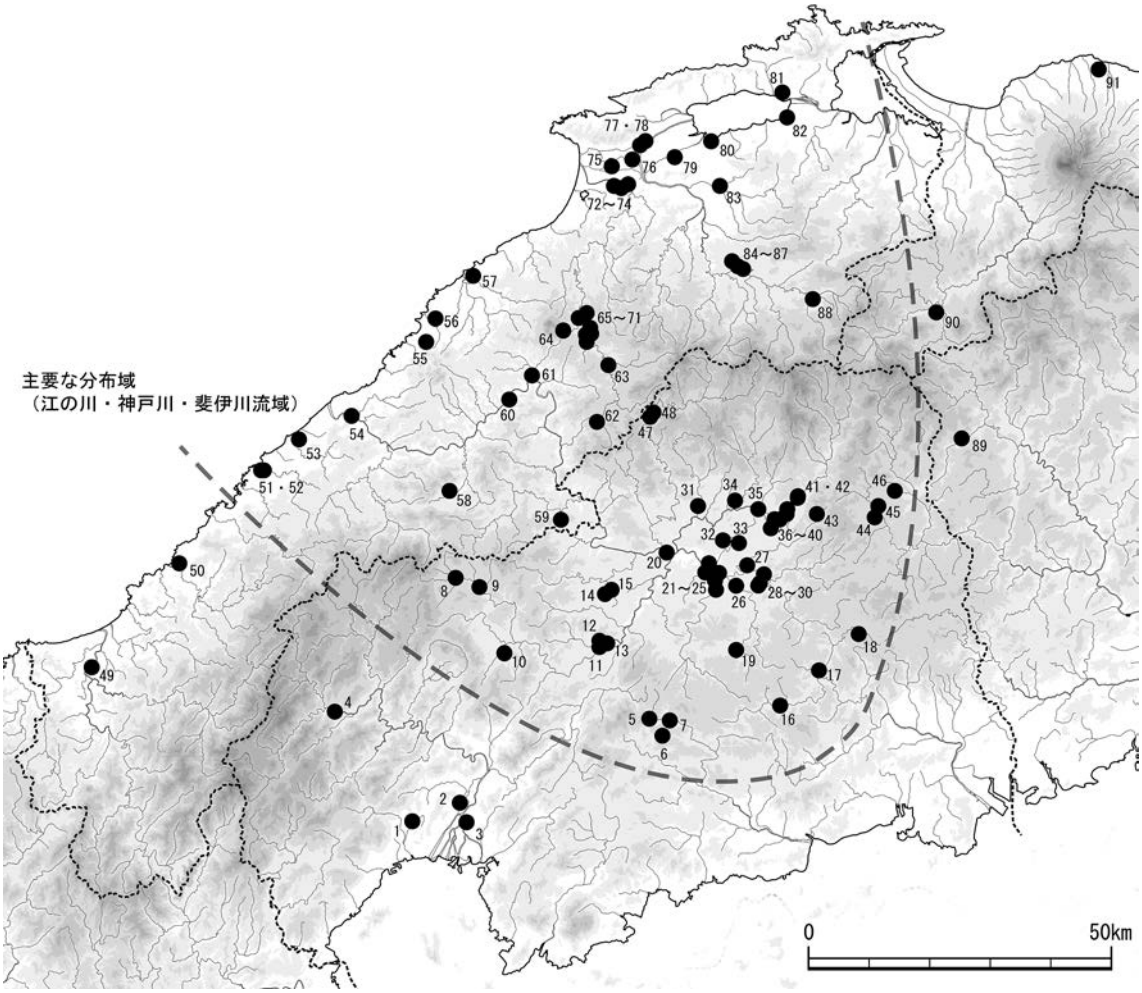
長友朋子は単なる土器地域色の把握からさらに考察を進め、それが示す備後北部の集団像にまで言及した（長友 2003・2013・2015）。長友は三次盆地の甕肩部への凹線施文が他地域にはない方法であること、それが胴部列点文と組み合わさり施文パターン上の強い規則性を示すことを指摘した。そして、同じく土器への施文方法に他地域と異なる傾向がみられる津山盆地の例も挙げ、装飾度が高く文様の選択に独自性をもつ山間部と、無文化が進み文様情報を変化させずに受容する沿岸部という対立構造を想定し、山間部における文様地域色の発



第３図　『弥生式土器集成』紹介の塩町遺跡出土土器（1/10）
１～４．甕　５．鉢　６～８．壺　９・10．蓋　11．脚付鉢

現要因を瀬戸内海側との物流頻度の高まりによる「われわれ意識」の投影と考えた。

土器の地域色そのものに関する内容ではないが、伊藤実は備後北部と周辺地域との交流や影響関係について総論的に触れている（伊藤 2004・2005)。伊藤は「塩町式」の成立に、文様や器種が類似し、かつ多様である石見を中心とした日本海沿岸部からの強い影響を想定しつつ､短脚高杯や小型壺といった一部の器種の系譜を瀬戸内海側に求めた。同時に「塩町式」の濃密な分布状況から出雲・石見・広島湾岸周辺との活発な交流を説く一方で、備後南部におけるその分布の希薄さを指摘した。ここで指摘された分布傾向は「塩町式」の出土例が増加した現在も変わっておらず（第４図)、「塩町式」の分布に示される人々の交流圏が、河川



第４図　「塩町式」甕の分布図

1. 下沖２号遺跡　2. 長う子・芳ヵ谷遺跡　3. 牛田遺跡　4. 土居山根遺跡　5. 乃美１号遺跡　6. 能良遺跡　7. 中屋遺跡Ｂ地点遺跡
8. 岡の段Ａ地点遺跡　9. 地宗寺遺跡　10. 日神原遺跡　11. 郡山城跡周辺遺跡　12. 郡山大通院谷遺跡　13. 郡山城跡遺跡　14. 寸志名遺跡
15. 新迫南遺跡　16. 箕口３号遺跡　17. 高村遺跡　18. 行年遺跡　19. 徳市遺跡　20. 岩脇遺跡　21. 陣山墳墓群　22. 知波夜比古神社遺跡
23. 上山手廃寺　24. 塩町遺跡　25. 殿山38号墓　26. 反遺跡　27. 皇渡遺跡　28. 杉谷Ｃ地点遺跡　29. 土森遺跡　30. 大谷遺跡
31. 峯定常双遺跡群　32. 竜王堂遺跡　33. 隠地上組遺跡　34. 戸の丸山遺跡　35. 割谷遺跡　36. 宮山２号遺跡　37. 小和田遺跡
38. 和田原遺跡群　39. 佐田谷・佐田峠墳墓群　40. 宮脇遺跡　41. 布掛遺跡　42. 大仙２号遺跡　43. 大原１号遺跡　44. 帝釈名越岩陰遺跡
45. 帝釈寄倉岩陰遺跡　46. 戸宇大仙山Ｄ地点遺跡　47. 上野谷遺跡　48. 建釜遺跡　49. 羽場遺跡　50. 海石西遺跡　51. 川向遺跡
52. 伊甘神社脇遺跡　53. 古八幡付近遺跡　54. 八神上ノ原Ⅱ遺跡　55. 孫四田遺跡　56. 大国地頭所遺跡　57. 鳥井南遺跡
58. 余勢の原遺跡　59. 菅城遺跡　60. 沖丈遺跡　61. 滝原遺跡　62. 赤穴八幡宮所蔵　63. 来島ダム内　64. 桝ヶ峠遺跡　65. 谷川遺跡
66. 神原遺跡群　67. 貝谷遺跡　68板屋遺跡群　69. 門遺跡　70. 小丸遺跡　71. 森Ｖ遺跡　72. 下古志遺跡　73. 古志本郷遺跡
74. 寿昌寺西遺跡　75. 白枝荒神遺跡　76. 中野西遺跡　77. 山持遺跡　78. 青木遺跡　79. 宮谷遺跡　80. 森屋敷遺跡　81. タテチョウ遺跡
82. 門田遺跡　83. 郡垣遺跡　84. 垣ノ内遺跡　85. 川平遺跡　86. 家の後Ⅱ遺跡　87. 北原本郷遺跡　88. 国竹遺跡　89. 山根屋遺跡
90. 丸山大洞遺跡　91. 梅田萱峯遺跡

や浸食地形など、備後北部の地理的特徴に概ね沿っていることがわかる。

島根県域の「塩町式」甕についても様相が整理され（石田 2013）、備後北部では僅少な左上がりの刻目文が一定数存在するという地域色が指摘された。また、胎土の肉眼観察によって、出雲平野部・出雲山間部・石見沿岸部の間では、備後北部から搬入された甕、在地化した甕の出土割合が異なり、地域間関係に温度差があることが想定された。

この他、和田麻衣子は備後北部の集落出土土器に安芸・備後南部・出雲・伯耆といった周辺地域からの影響を想定した（和田 2016）。

（２）課題の抽出

備後北部の第Ⅳ様式土器に関する先行研究は、特に1990年代までは編年的視点のものが中心であった。その後、地域色を扱ったものが散見するが、指摘を越えて評価にまで踏み込んだものは稀である。地域色のレベルについても備後北部あるいは県北部地域としてのまとまりが変わらず強調され、『広島県の弥生土器』以降、新たな展開はみられない。地域内における土器の地域差について、その可能性を指摘した考察が一つだけあるが（石井・刎本 2003）、文様構成の変遷仮説や、文様差が地域差であると結論するまでの説明に不明な点が多く、援用は難しい。また、甕に限ってみても、肩部文様をもとに「塩町式」と識別される[(3)]以外の資料についての評価は十分でないが、実際は文様構成などの点により「塩町式」の範疇から外れる資料は決して少なくない。このような現状から、備後北部内における土器の地域差の有無を「塩町式」以外も含めた全体から検討することには意義がある。

３．資料の分析

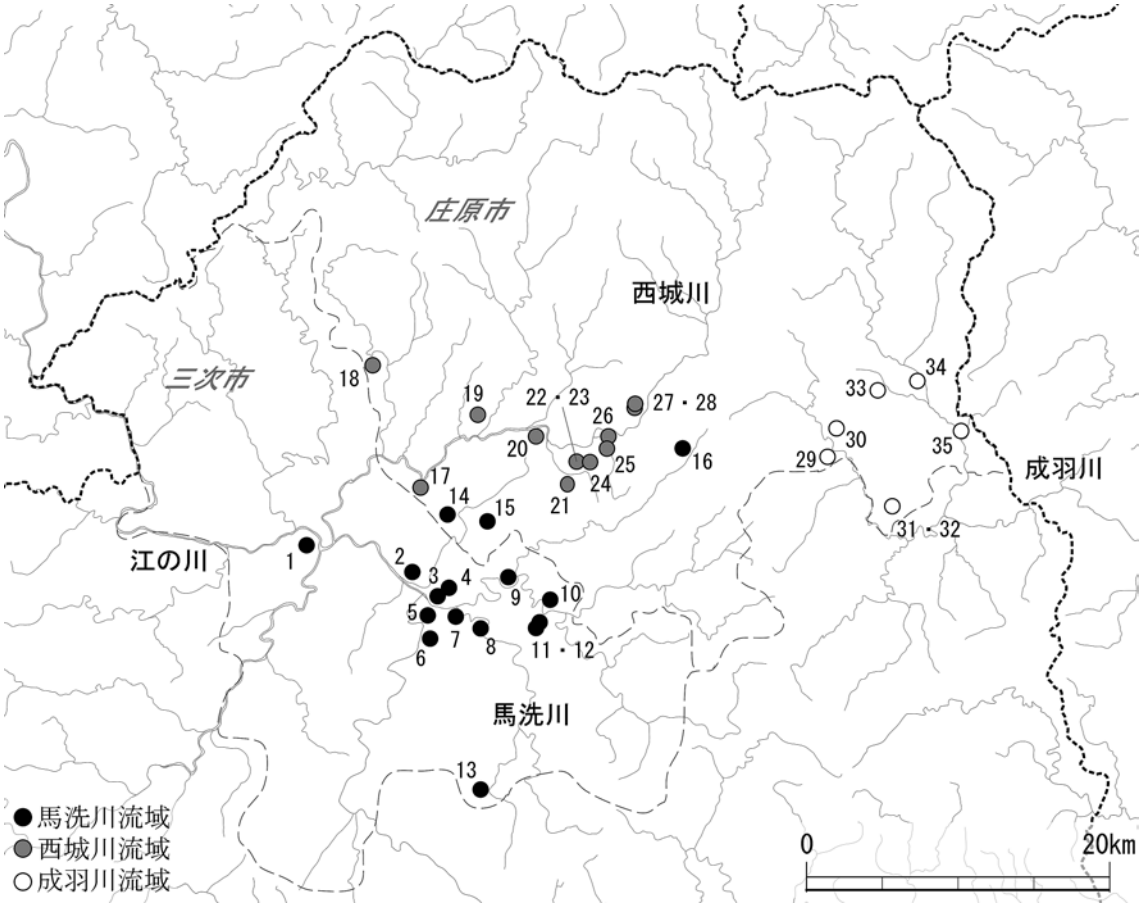
（１）対象資料と分析視点

地域設定　当該地域を流れる江の川（可愛川）は広島県山県郡北広島町の阿佐山を源として、北広島町域北東部、安芸高田市域内を東側へと流れ、三次市街地周辺で神野瀬川・馬洗川・西城川の主要支川と合流して一本になり、北西に流れていく。支川の合流点付近を中心に三次盆地、その東方に庄原盆地が開け、他にも河川沿いにいくつかの小盆地が展開する地形条件となっている。本稿では特に資料分布の濃い支川流域に注目し、馬洗川流域[(4)]と西城川流域に大きく区分した地域設定を行った（第５図）。基本的にこの２流域を対比させる形で論を進めたい。

分析対象　本稿では器種としては甕を、時期としては第Ⅳ様式の資料を取り扱う。甕は出土例が比較的豊富であり、また第Ⅳ様式は分析に有用な文様が前後の時期に比べて多く施されるためである。

資料の選定は、口縁部形態・文様・内面調整を基準に行った。第Ⅳ様式の指標としたものは次のとおりであり、これらの要素から総合的に判断した。まず、口縁部形態は端部を上下いずれか、あるいは上下両方向に拡張された拡張口縁のものを選んだ。確保された口縁部端面には例外なく２～３条の凹線が施されているのが特徴である。

文様上の特徴は、肩部および胴部最大径付近に全周する帯状文様が施されることで、概ね



第５図　分析対象資料出土遺跡一覧

１. 岩脇遺跡　２. 陣山墳墓群　３. 上山手廃寺　４. 宮の本遺跡　５. 塩町遺跡　６. 殿山38号墓　７. 岡田山第３号古墳
８. 反遺跡　９. 皇渡遺跡　10. 大谷遺跡　11. 土森遺跡　12. 杉谷Ｃ地点遺跡　13. 徳市遺跡　14. 竜王堂遺跡
15. 隠地上組遺跡　16. 大原１号遺跡　17. 馬ヶ段遺跡　18. 原畑遺跡　19. 戸の丸山遺跡　20. 割谷遺跡　21. 宮山２号遺跡
22. 小和田遺跡　23. 西山遺跡　24. 和田原遺跡群　25. 佐田谷・佐田峠墳墓群　26. 宮脇遺跡　27. 大仙２号遺跡
28. 布掛遺跡　29. 帝釈名越岩陰遺跡　30. 帝釈寄倉岩陰遺跡　31. 梶平塚第２号古墳　32. 大塚遺跡　33. 戸宇大仙山Ｄ地点遺跡
34. 若松遺跡　35. 久代東山岩陰遺跡　※番号は付表に対応

備後北部全体に共通する。後述するように、特に凹線文を駆使する肩部文様が顕著であり、第Ⅴ様式初頭まで存続する。

器面調整における大きな特徴の一つは、内面ヘラケズリである。第Ⅳ様式ではこの内面ヘラケズリの観察される位置が胴部下位から中途で留まるが、第Ⅴ様式になると内面全体へのヘラケズリと、頸部直下への横方向のヘラケズリが観察されるようになるのが、中国地方全体で概ね共通した変化といえる（正岡・松本編 1992）。備後北部の甕についても、内面ヘラケズリのあり方から同様の時期的変化を想定できる（妹尾 1992）。したがって、肩部文様が施されていても、内面全体へのヘラケズリと、頸部直下への横方向のヘラケズリが観察できるものは第Ⅴ様式に降るものと判断し、分析対象からは除外した。

なお、口径が大きく開き鉢形を呈する個体、口径が小さく小鉢形を呈する個体には、最終的なプロポーションを除けば、細部形態から施文まで、甕と大部分の特徴が共通するものがあり[(5)]、破片資料の場合は甕との判別が難しい。そのため、本稿ではこのような鉢を無理には除外せず分析対象に含めた。

この他、第Ⅳ様式と判断できる個体であっても、口縁部のみの細片、肩部や胴部のごく一部しか残存しないものについては、諸属性を組み合わせての分析に耐えないため、分析対象から除外した。

分析視点　甕には多くの属性が備わっているが、肩部・胴部文様にまず注目しなければならない。「塩町式」の指標とされる多条の凹線文と刻目・刺突文が組み合わさった重層刻目文（伊藤 2004・2005）を筆頭に、高い頻度で出現する肩部文様が当該地域における土器の最大の特徴である。

同時に、肩部文様が施される部位としての肩部形態と、その近接部位の頸部形態にも注目する。これらの部位を取り上げる理由は、破片資料の断面において、肩部・胴部の帯状文様と一致する位置に粘土接合痕と考えられる線状痕跡が確認できる例があり（図版第１－１～４）、帯状文様に粘土の接合補強機能が期待されていた可能性が高いことから、文様のあり方とその周辺部位の形態的特徴の有機的関係の有無が、分析の重要な視点になると考えるからである。

以上により選んだ対象資料の総点数は304点（付表：馬洗川流域155点、西城川流域134点、成羽川流域15点（参考地域））となったが、属性によって扱える資料点数に異同があることをはじめに断っておく。

（２）文様の分析

文様の分類　まず、肩部文様は凹線文と刻目・刺突文による帯状文様が主体となり、その組み合わせから次のように分類できる（第６図）。

Ａ類：３条以上めぐらされる凹線と刻目・刺突の列点文が一体化して文様帯を形成する。

Ｂ類：刻目・刺突文の上下端に凹線がめぐらされる。

Ｃ類：刻目・刺突文の下位を中心に１～２条の凹線がめぐらされる。

Ｄ類：刻目・刺突文のみがめぐらされる。

Ｅ類：凹線文のみがめぐらされる。

Ｆ類：施文が行われない。

この他、ごく少数、刻目凸帯文が施されるもの、頸部に粘土紐が巻き付けられるものがある。これまで「塩町式」の指標の一つとされる重層刻目文（本稿ではＡ類）が注目を集め、当該地域・時期の代表的な文様とされてきたが、実際に確認できる文様は多岐に渡る。

続いて、胴部文様は工具で刺突した帯状文様が主流となるが、重層刻目文が施される個体、無文の個体が少数含まれる。その段数、施文原体も考慮すると次のように分類できる。

ａ類：櫛歯状工具によって１段の列点文がめぐらされる。

ｂ類：櫛歯状工具によって２段以上の列点文がめぐらされる。

ｃ類：板状工具によって１～２段の刺突文がめぐらされる。

ｄ類：重層刻目文がめぐらされる。

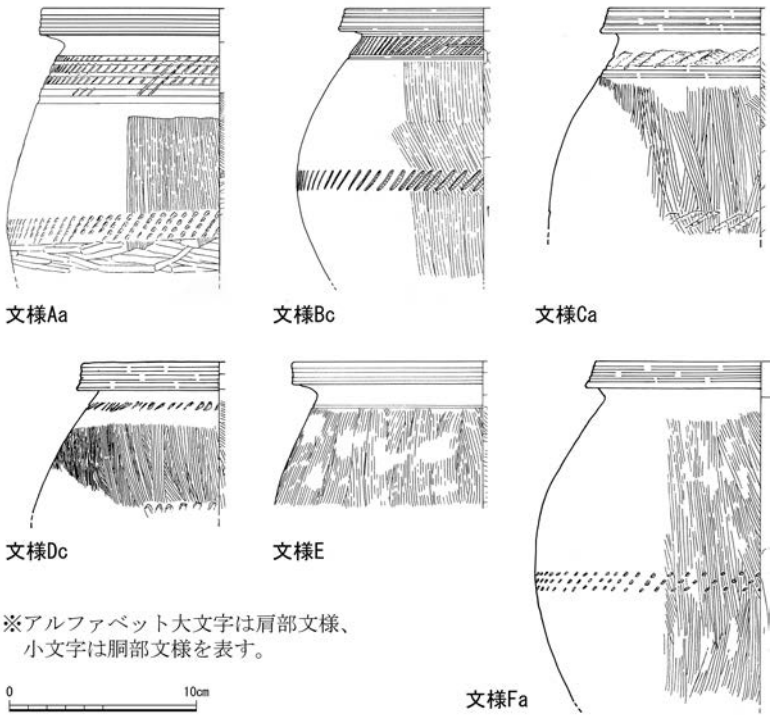
ｅ類：施文が行われない。

肩部文様の分析　先述の分類をもとに、各地域における文様の構成比率をみていきたい。馬洗川・西城川の両流域を比較したとき、主流がＡ類の重層刻目文で、次点にＦ類の無文が一

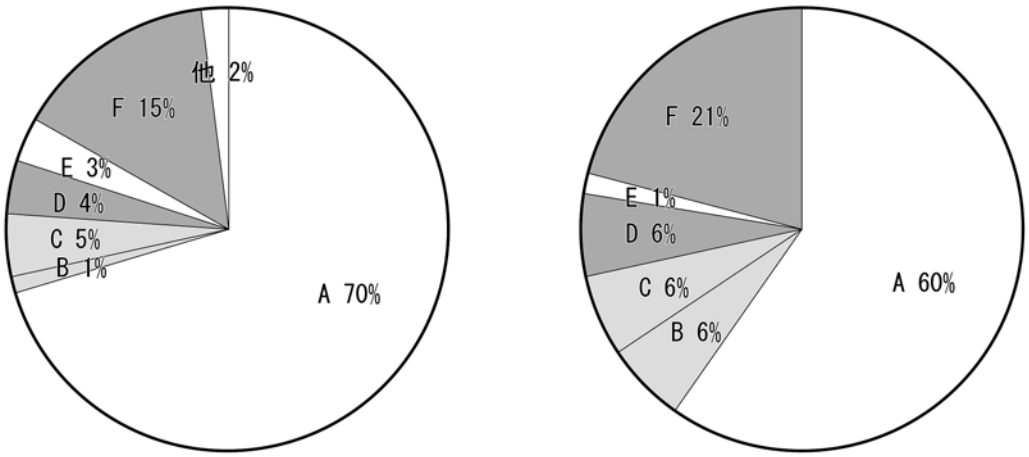
定数存在するという点はまず共通している（第７図）。ここで、先に分類した肩部文様の性格を、凹線文への依存度という観点から考えると、次のような解釈が可能である。まず、Ａ類は凹線文がなくては成立せず、その条数も最も多い。Ｂ・Ｃ類も凹線文がなくては成立しないが、条数からみると、Ａ類と比べて凹線文への依存度は下がる。Ｄ・Ｆ類は全く凹線文に依存しない文様である。このように考えるならば、Ａ類が70％で大半を占め、Ｂ・Ｃ類が６％、Ｄ・Ｆ類が19％となる馬洗川流域に対し、同じくＡ類が60％で大半を占めつつも減少し、Ｂ・Ｃ類が12％まで、Ｄ・Ｆ類が27％まで増える西城川流域は、土器製作における凹線文への依存度・執着度が比較的低いといえる。

これを念頭に、さらに肩部文様Ａ類の個体間における凹線の条数を参考として比較すると、馬洗川流域では中央値４条（平均値3.9条）、西城川流域では中央値３条（平均値3.5条）となり、馬洗川流域が多条化傾向にある。先述の把握と一応矛盾はない。

なお、図示は省略するが、馬洗川・西城川流域からみて東方にある、瀬戸内海につながる高梁川支川の成羽川流域では、

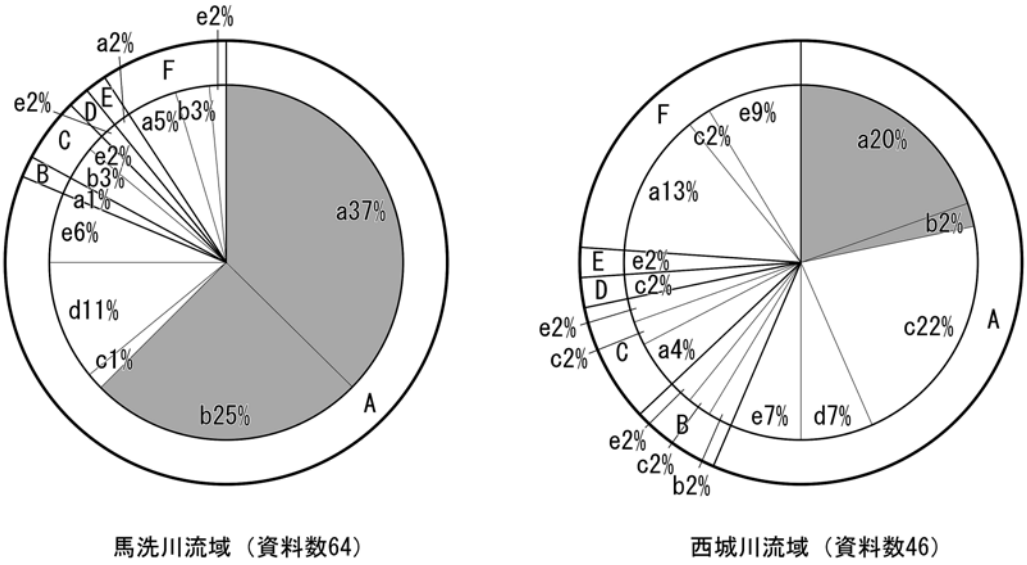


第６図　甕文様の諸例（1/4）



馬洗川流域（資料数155）　西城川流域（資料数134）

第７図　肩部文様の構成比率



馬洗川流域（資料数64）　　西城川流域（資料数46）

第８図　肩部・胴部文様の組み合わせの構成比率

資料15点のうちＡ類が４点、Ｆ類が７点、頸部粘土紐が４点となり、肩部文様をもつ個体そのものが少ない。江の川流域に属する他の２流域とは土器の意匠、ひいては土器製作者の生活圏が異なり、地域色の発現に流域・地形が強く関係していることが理解できる。

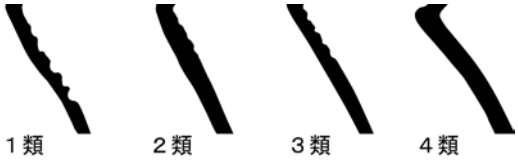
胴部文様の分析　胴部文様については、肩部文様との組み合わせがわかる個体を選んで分析を行った（第８図）。まず、馬洗川流域ではパターン Aa・Ab で計62％を占める。胴部文様単体の構成比率をみると a 類が45％、b 類が31％と櫛歯状工具を用いた施文が大半であり、d 類の重層刻目文が11％､e 類の無文が12％となり､c 類の板状工具刺突はわずか１％である。一方の西城川流域ではパターン Aa・Ab は合わせてわずか22％に留まり、パターン Ac が単体で22％となり最多数である。胴部文様単体の構成比率をみると、馬洗川流域と比べて胴部文様 a 類が37％、b 類が４％とともに数を減じるが、特に櫛歯状工具による列点文が２段以上施される b 類は激減している。一方で、馬洗川流域ではごく少なかった c 類の板状工具刺突が30％、e 類の無文も22％となり存在感を増している。

以上のように、馬洗川流域では Aa・Ab の２つの文様パターンへの収斂傾向が顕著に窺える反面、西城川流域では肩部文様Ａ類は共有しつつも、馬洗川流域におけるパターン Aa・Ab のように他を圧倒する組み合わせがなく､文様構成が拡散傾向にあることが指摘できる。胴部文様はそれ単体でも地域差が明瞭であり、馬洗川流域では他を圧倒する状況をみせていた櫛歯状工具を用いた a・b 類が西城川流域では激減し、特に b 類が僅少になると同時に c・e 類が大きく増加する。出現頻度からみて、胴部文様 b 類はそれ単体で馬洗川流域の地域色、胴部文様 c 類の板状工具刺突はそれ単体で西城川流域の地域色であることが指摘できる。

（３）形態の分析

形態の分類　まずは頸部形態を、内面の口縁部と体部の接続部分について、その稜が鋭いものと鈍いものの２つに大別した（第９図）。頸部形態の各地域における構成比率は、馬洗川

第９図　頸部形態の分類



第10図　肩部形態の分類

第１表　頸部・肩部形態の組み合わせに関する指数

頸部内面の稜が鋭い個体　頸部内面の稜が鈍い個体

		馬洗川 (%)	指数 (馬−西)	西城川 (%)	馬洗川 (%)	指数 (馬−西)	西城川 (%)		
肩部形態	全体	100(48)		100(52)	100(62)		100(38)	全体	肩部形態
	１類	13(53)	3(6)	10(47)	20(64)	2(28)	18(36)	１類	
	２類	24(59)	8(18)	16(41)	26(66)	3(32)	23(34)	２類	
	３類	45(46)	−4(−8)	49(54)	42(61)	−1(22)	43(39)	３類	
	４類	15(48)	−1(−4)	16(52)	4(75)	2(50)	2(25)	４類	
	不明	3		9	8		14	不明	

※馬洗川・西城川両流域の列内の数字は、括弧外が地域内構成比、括弧内が地域間対比の百分率である。指数は各肩部形態において、馬洗川流域における各比率から西城川流域における各比率を、括弧外・括弧内同士で引くことで算出している。

流域では内面の稜が鋭い個体と鈍い個体が各50%であるのに対し、西城川流域では稜が鋭い個体が63%となり増加し、資料数は少ないが成羽川流域においても内面の稜が鋭いものが構成比率67%で多数派となる。共有されている頸部形態が隣接地域間で漸次的に変化している可能性がある。

肩部形態は断面形態から以下のように分類した（第10図）。

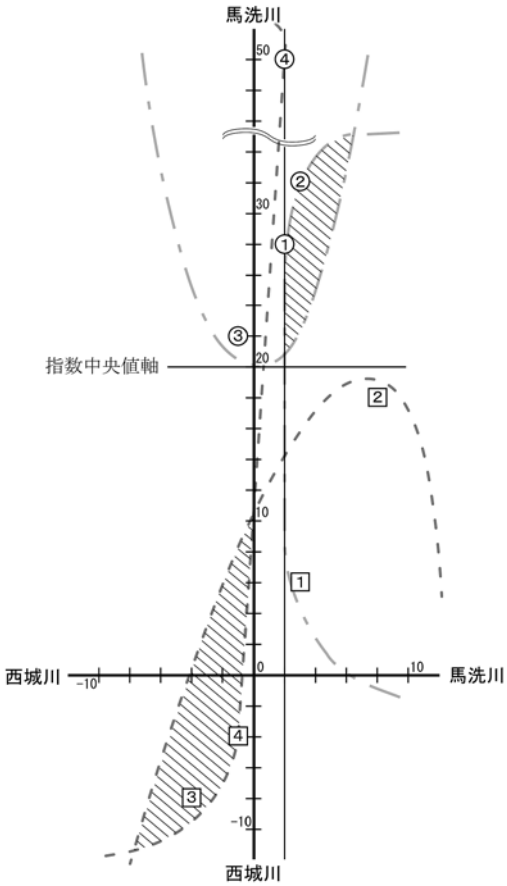
１類：断面における外形線・内形線がともに内側に凹む。

２類：断面における外形線は変化しないが内形線が内側に凹み、わずかに厚くなる。

３類：断面における外形線・内形線が大きく変化しない。

４類：断面における外形線・内形線が外側に張り出す。

指数を用いた分析　各部の形態ごと、地域ごと、地域間における頸部・肩部形態の組み合わせを同時に考慮・可視化するため、指数を算出の上、図化して傾向の把握を試みた（第１表・第11図）。求めた指数が第１表指数列の太枠内、それを分布図にしたものが第11図である。地域内構成比



横軸：地域内構成比率に関する指数
縦軸：地域間対比率に関する指数
□：頸部内面の稜が鋭い個体
○：頸部内面の稜が鈍い個体
□・○内の数字は肩部形態分類
一点破線は馬洗川流域に分布が傾く組み合わせ
破線は西城川流域に分布が傾く組み合わせ

第11図　指数分布図（形態×地域）

率に関する指数は、ある頸部と肩部の組み合わせがその地域において好まれている度合いを示すと換言できる。プラスなら右方へ、マイナスなら左方へ図上を動く。地域間対比率に関する指数は、ある頸部と肩部の組み合わせの地域間における直接的な物量比を反映する。プラスなら上方へ、マイナスなら下方へ図上を動く。いずれの指数についても、プラスなら馬洗川流域、マイナスなら西城川流域において、度合いとして相対的に優勢な組み合わせということができ、右上（左下）に動くほど馬洗川（西城川）流域寄りの組み合わせであることになる。指数値０を基準とした縦横軸（以下、０軸）からみた分布が実際を示し、各指数の総和の中央値を基準とした縦横軸（以下、中央値軸）からみた分布によって、相対的な地域間の傾向を読み取ることができる。

０軸を基準としてみた場合、垂直分布状況からは、０軸よりも下方にある、頸部内面の稜が鋭く肩部３・４類を呈する組み合わせは実際に西城川流域で多く出土しているが、それ以外の組み合わせは実際に馬洗川流域で多く出土しており、特に頸部内面の稜が鈍い個体、肩部１・２類を呈する個体は、組み合わせに関わらず馬洗川流域に多いことがわかる。水平分布状況からは、０軸よりも左方にある、頸部内面の稜が鋭く肩部３・４類を呈する組み合わせ、頸部内面の稜が鈍く肩部３類を呈する組み合わせは西城川流域においてより好まれている度合いが高く、それ以外の組み合わせは馬洗川流域において好まれている度合いが高いといえる。続いて、中央値軸を基準としてみた場合、垂直分布状況は頸部内面の稜が鈍い（鋭い）個体は中央値軸よりも上方（下方）へ、水平分布状況は肩部１・２類（３・４類）の個体は右方（左方）への分布傾向を示している。各組み合わせは馬洗川・西城川の両流域でみとめられるものの、２つの軸に基づく視点から単純化すると、頸部内面の稜が鈍く肩部１・２類を呈する組み合わせと、頸部内面の稜が鋭く肩部３・４類を呈する組み合わせが一見対極的に分布しており、前者を馬洗川流域と、後者を西城川流域と結びつけて考えることができそうである。

４．考　察

（１）備後北部内における土器の地域差

馬洗川・西城川の２流域の状況を今一度確認したい。まず、馬洗川流域における施文上の特徴として、肩部に重層刻目文が施され、胴部に櫛歯状工具による列点文が施される組み合わせ〔パターン Aa・Ab〕への収斂傾向がみられ、凹線文への依存度が相対的に高かった。また、形態上の特徴として、頸部内面の稜が鈍く、かつ肩部は内側に凹む、あるいはわずかに厚みをもつ〔肩部１・２類〕個体が相対的に多く、また好まれる傾向にあった。

西城川流域における施文上の特徴として、肩部・胴部文様の組み合わせに拡散傾向がみられ、凹線文への依存度は相対的に低く、肩部・胴部とも無文が比較的多かった。また、形態上の特徴として、頸部内面の稜が鋭く、かつ肩部は内側に凹まない、あるいは外側に張り出す〔肩部３・４類〕個体が相対的に多く、また好まれる傾向にあった。

このように、馬洗川・西城川の２流域間の甕に、大局的な地域差と考えられる文様・形態上の違いが確認できた。以下、把握できた地域差を、文様と形態の製作上の有機的関係という視点から評価してみたい。

馬洗川流域の評価　資料断面の帯状文様と対応する位置に粘土接合痕が確認できたことにより（図版第１－１～４）、文様に粘土の接合補強機能が備わっていたと考えられる例があることを先に述べた。施文による粘土同士の接合を入念に行うには、施文時の粘土はやわらかく、可塑性を残した状態がより適しているといえる。肩部１類は施文時に外からの力が加えられて内側に凹んだ形態となり、肩部２類は肩部において粘土が接合されたため、わずかに厚みをもつ形態となったと考えることができる。この２形態は、肩部で入念な粘土接合を行う製作方法と関連するものと考えられ、馬洗川流域とより関わりが深い。頸部内面の稜が鈍く、かつ肩部１・２類を呈する甕は、断続成形において体部成形を肩部以下まで行った段階で半乾燥の工程をはさむものと推測できる。このような甕のなかには、後述するような肩部施文以前に頸部直下まで体部全体にタテハケ調整が行われた個体は今のところ観察できていない。粘土接合痕からみて（図版第１－１～４）、本来、体部と肩部以上の粘土を接合する目的で肩部施文が行われており、肩部施文が付加的なものでなく、製作上の重要な工程として位置づけられていると考えられる。

頸部内面の稜が鈍く、かつ肩部１・２類を呈する資料の多かった馬洗川流域では、文様パターン Aa・Ab が圧倒的多数となったが、これは、その２パターンが粘土接合上の効果が高いと判断されたために収斂傾向をみせたとも考えられよう。当地域における相対的な凹線文への依存度の高さは、粘土接合の手段として第一に凹線施文が選択されたためであり、相対的な凹線の多条化は、施文範囲の拡大による粘土の面的な圧着効果を期待したためと考えることができる。

なお、おそらくはヘラケズリによって薄手になりやすいなどの要因から、胴部文様と対応する接合痕はあまり確認できていない（図版第１－４）。しかし、上述の肩部との組み合わせ上の収斂傾向から、胴部文様にもある程度の接合効果が期待されていた可能性がある。甕胴部の帯状文様そのものは周辺地域でも一般的にみられるため、胴部文様の機能については各地域で個別に判断する必要があるが、馬洗川流域において特に胴部文様ｂ類（２段の列点文）が多くみられたことは、凹線の多条化と同じく、施文範囲の拡大によって粘土の圧着効果を高める意図があったことを示す可能性がある。

西城川流域の評価　肩部３・４類の形態は、施文時において、粘土同士の圧着に必要な粘土の可塑性が前二者と比べて失われていると考えることができる。つまり、この２形態は肩部施文を行う場合でも、肩部における粘土接合には重きを置いていないものと捉えることができ、西城川流域とより関わりが深い。同時に西城川流域では、頸部形態としては内面の稜が鋭いものが多かった。頸部内面の稜が鋭く、かつ肩部３・４類を呈する甕のなかには、頸部内面に粘土接合とみられる痕跡が確認できる（図版第１－５）。このような甕は、体部成形を頸部まで行った段階で半乾燥の工程をはさむものと推測でき、比較的乾燥の進んだ体部と

口縁部となる粘土が接合されたことで、頸部内面に鋭く明瞭な屈曲が生まれたものとみられる。さらにこのような甕のなかには、肩部施文以前に頸部直下まで体部全体にタテハケ調整を行った痕跡を残すものがあるほか（図版第１－６・７）、施文時の器面が比較的硬かったために、凹線文の彫りが浅く、凹線文が整美な直線とならず歪んだと捉えられるものがある（図版第１－６）。これは、体部全体を縦ハケ調整した後で肩部文様を施す手順が基本になっていることを示すものであろう。この場合、肩部を含めた体部の粘土接合において最も効力をもつのは縦ハケ調整であり、肩部文様の貢献度は相対的に低くなる。当該地域でみられる無文土器（図版第１－８）と同じような体部成形を終えた後に、付加的に肩部施文が行われる製作手順といえる。

肩部でなく、頸部に接合痕を残す製作方法は、粘土紐を巻いて頸部を補強する甕と関連している可能性がある（第12図左）。頸部に粘土紐を巻く甕は馬洗川・西城川流域では僅少であるが、出雲・伯耆・備中・備後南部など、周辺地域では一定量存在している。

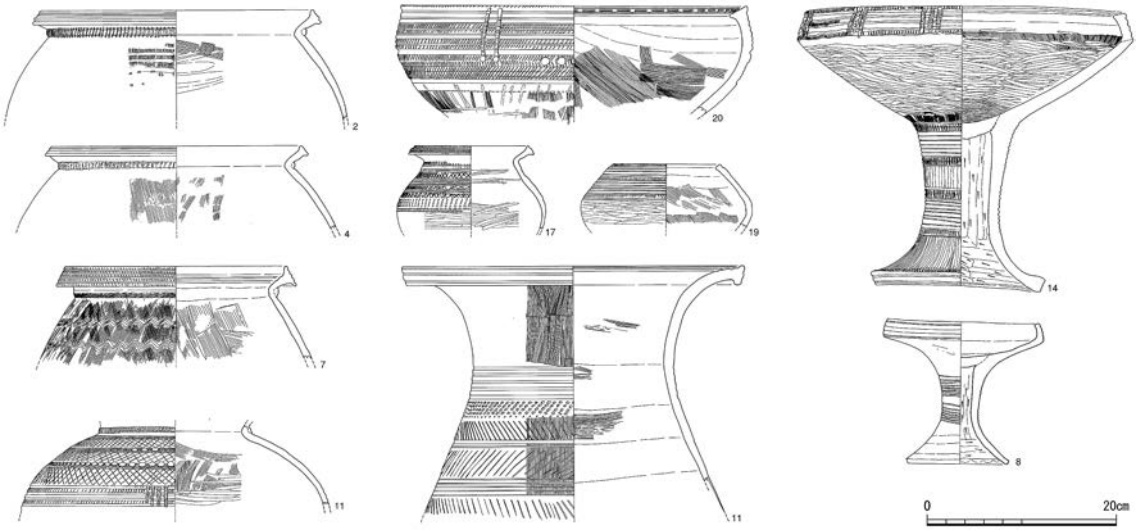
述べてきたように、頸部内面の稜が鋭く、かつ肩部３・４類を呈する甕の製作においては、肩部文様による粘土接合の補強効果はさほど期待されていなかったとみられる。そのような甕が多くみられた西城川流域では、肩部・胴部無文の資料の多さ、文様選択における拡散傾向が見受けられた。粘土接合手段としての文様選択の必然性の弱さがこの拡散傾向に反映されている可能性がある。また、西城川流域では凹線文への依存度が相対的に低かったが、これも馬洗川流域と比べて施文範囲の拡大による粘土の面的な圧着効果への意識が低かったためであろう。西城川流域では、文様の「表層的要素」（深澤 1986）としての色合いがより強かったであろうことが想定できる。

このように、２流域間でみられた肩部・頸部形態と文様上の地域差は、断続成形時における体部以上の粘土接合位置と施文のタイミングが異なる製作方法、およびそれに影響された文様選択への意識の差によって導かれていると考えられる。

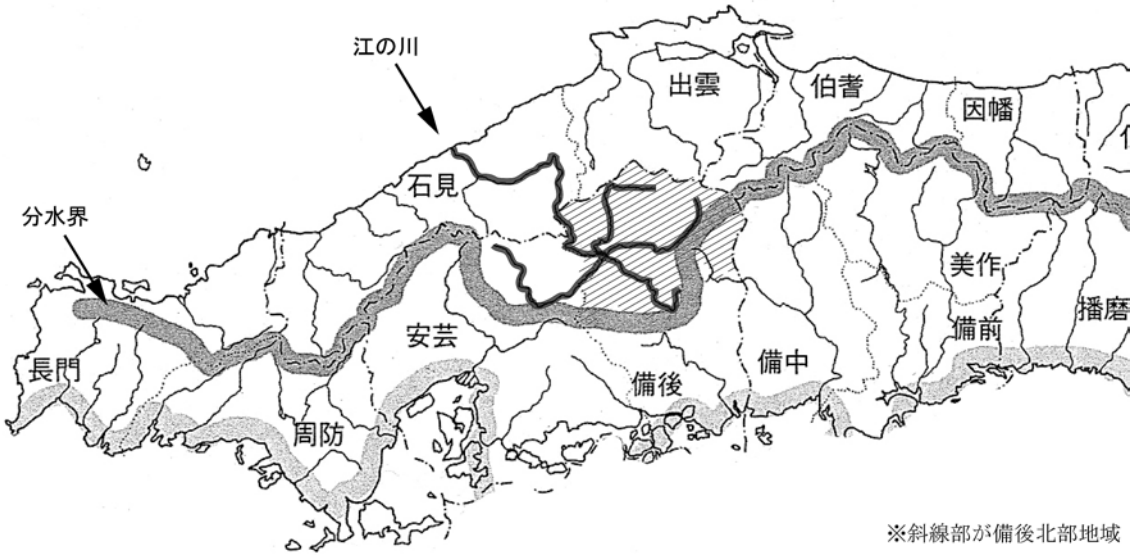
地域色の漸次的な変化　馬洗川・西城川の２流域に単純二極化した上で、備後北部のなかにおける地域差を指摘することを目的に論を進めてきたが、両流域は本来的には距離も近く、地形的障壁もさほどない同一文化圏であり、密接な交流があったことは間違いない。土器様相として共通点も多く、実際にはそこに明確な線を引けるものではない。頸部内面の稜が鈍く、かつ肩部１・２類を呈する甕と、頸部内面の稜が鋭く、かつ肩部３・４類を呈する甕という製作方法を違える二者は両地域に存在するし、それ以外の組み合わせの甕も多様に存在する。おそらくは、備後北部のなかで少なくとも二者の製作型が基本形として共有されつつも、密接な交流にともなって、形態・文様に反映される部位ごとの製作・施文方法が複雑に“交雑”している。そのようななか、地理的傾斜によって二者の製作型への比重が両流域の間で漸次的に変化し、今回指摘した地域差となって表れているものと考えられる。

（２）備後北部の土器地域色

最後に備後北部としての地域色の発現要因についても触れておきたい。当該地域における第Ⅳ様式土器の特徴の一つとして常に「強い加飾性」が強調されてきた（加藤・桑原・山田



第12図　島根県の中期土器（雲南市・垣ノ内遺跡）（1/8）



第13図　中国地方における備後北部の位置

1985)。しかし、備後北部の土器の加飾度を相対的にみた場合、地域としては瀬戸内海側よりも文様が豊富であるとみなせる一方、島根県を中心とした日本海側の土器とは装飾の程度や器種構成において様相が近く（伊藤 2004・2005、第12図)、一概に“どちらが派手”とは答えられない。これには、単純に備後北部と日本海側との距離が近いこと以上に、所属する河川流域など日本海側とつながりやすい備後北部の地理条件が大きく関係していると考えられる（第13図)。地形的に交流をもちやすい相手が日本海側だったために、恒常的な接触・情報交換の結果として、近い特徴の土器群が作られたのであろう。肩部に重層刻目文が施される甕（「塩町式」甕）（第２～４図）や四隅突出型墳丘墓・方形貼石墓の分布には、備後北部と日本海側の密接なつながりが如実に表れている。

また、器種ごとに比較すると、一個体に多彩な文様が共存する脚付鉢が最も加飾度が高いといえるが、これは、脚付鉢が主に祭祀や墳墓において使用された（妹尾 1992、真木 2017)

ことが関係していると考えられる。対して、甕・壺・高杯といった常用器種については、凹線文・列点文・刻目文といった一部の文様要素を基調に施文が行われており、器種としての相対的な加飾度は低い（第３図）。甕については肩部文様以外の製作方法などの特徴には、山陰地方など周辺地域の甕と大差がない（長友 2003、石田 2013）。したがって、当該地域では土器の加飾度は日常・非日常という使用の場面に応じて調節されており、これは周辺地域でも同じことがいえる。以上により、備後北部の土器がもつ「強い加飾性」については、土器群全体を指した絶対的な評価とするにはやや無理があり、「瀬戸内海側と比べて」「常用器種と比べて」という前置きがあってはじめて意味が通るものということができる。

備後北部の土器群が示す「強い加飾性」に加えて、甕肩部への凹線施文という他地域にはない独自性、それが胴部列点文と組み合わさる施文パターン上の強い規則性という点を指して、瀬戸内海側との物流頻度の高まりに刺激を受けた、沿岸部に対する山間部としての「われわれ意識」の投影とする意見がある（長友 2003・2013・2015）。長友によって比較対象とされたのは主に瀬戸内海に面した各地域の土器であったが、先述した備後北部の地理条件や日本海側の土器様相を考慮すれば、備後北部の土器地域色の発現には、瀬戸内海側という「外」に対する反発的な要因以外に、まずは地形に囲われて半ば自然発生的に日本海側と共有された、土器地域色の一様相を示している可能性も考えられよう。その評価についても、沿岸部に対する山間部という見方よりも、日本海側と瀬戸内海側の土器地域色の大局的な対比という見方がより適切に思える。大きく日本海側の土器地域色に属するなかで、さらに備後北部としての地域色が現れた理由については、瀬戸内海側だけでなくむしろ日本海側の状況との比較を中心に、土器の搬出入やその他考古資料の動向も総合した地域間関係の追及をもとに探っていく必要がある。

また、本稿においてもパターン Aa・Ab を代表に追認した、甕肩部への凹線施文と胴部列点文という施文パターンの規則性・反復性については、文様が集団表象としての機能を兼ねた可能性を認めつつ、第一の要因としては本来的に施文が製作上の機能を備えていたために生じた可能性が高いと考える。体部の施文が肩部・胴部に固定されているのは成形時における粘土の接合位置に制約されたためであり、規則的に登場する文様が必ず全周する帯状文様であることはこの理解と整合的である。

５．おわりに

本稿では、これまで検討されてこなかった備後北部内における土器の地域差について、甕の肩部・胴部文様と頸部・肩部形態を素材として分析を行い、馬洗川流域と西城川流域の２流域間において、地域差と捉えうる施文と形態上の傾向の差を見出した。そして、製作時に文様が果たす機能という観点からみると、ある場合において文様と細部形態は有機的関係をもっており、それが従来認知されてきた当該地域における文様地域色の発現につながっている可能性を指摘した。今回は支川の流域単位で大きく２つの地域設定を行った。両流域間の差をまずは明らかにしたことで、今後、小河川・小盆地ごとのさらなる地形の細分をもとに

した、より細やかな土器製作者の交流を検討する叩き台になればと願う。

土器の文様は確かに、煮沸・貯蔵などの実用時においては不要な付加的（表層的）要素であり（深澤 1986）、この観点から土器が使用される場で期待される文様の機能を考えるならば、それは視覚効果を念頭に置いたものになる。しかし今回、粘土接合痕と対応する、土器製作の場において機能したであろう帯状文様を確認し、文様の果たす機能が一様でないことを明らかにした。このような粘土接合痕は、個体ごとの器面の風化度合いや粘土接合の入念さ、器壁の薄手化の程度によって、肉眼で明瞭に観察できる例は決して多くはないものの、観察できた一部の資料が“氷山の一角”であり、肉眼で確認できなかったなかにも同様の個体が潜んでいる可能性を想定することは許されよう。

弥生時代の例のみを挙げても、九州地方北部の甕棺の胴部突帯（高島 1977）、前期の甕・壺の段や突帯文（井藤 1986）、瀬戸内地方の中期甕の頸部粘土紐（長友 2001・2013）など、成形時における粘土の継ぎ目に対応して水平方向に展開し、時にその接合補強が想定される帯状文様・造形は各時期・各地にみることができる。備後北部の甕の帯状文様も一つの事例となろう。一見“派手”にみえる文様であっても、その役割の考察にあたっては、資料の観察をもとにあらゆる可能性を各地域で個別に検討する必要がある。

本稿は2014年１月10日に広島大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部、2019年９月14日開催の考古学研究会岡山９月例会における発表内容の一部、2019年10月27日開催の広島史学研究会考古学部会における発表内容の一部をもとに文章化したものである。

執筆にあたっては、広島大学考古学研究室の野島永先生、有松唯先生からご指導と有益なご助言をいただきました。末筆ながら記して深謝いたします。

註

⑴ 弥生時代に旧国区分は存在しないが、本稿では便宜的に当該地域を備後北部と表記し、備後北部以外の地域についても同様に旧国名で表記する。あわせて旧国名に続く「地域」を省略する（例：石見地域→石見、備後南部地域→備後南部）。

⑵ 本稿では土器の形式名に続く「形土器」を省略表記する（例：甕形土器→甕）。

⑶ 先行研究において議論の前提となっている「塩町式」のそもそもの定義が不明であることは大きな問題である。現状「塩町式」の特徴を表す言葉は「豊富な品種」「強い加飾性」だけである。甕を除けば型式の指標もきわめて曖昧な現状があり、それらしき個体が出土した際には個々人の主観のみによって、明確な基準の説明も伴わない形で「塩町式」と判断される。特に県外で混乱があり、実際には備後北部にも類例のない資料まで「塩町式」とされることがある（植田1999・湯村編2002・禰冝田2019：脚付鉢。増田2003：大型でボウル状の鉢、第12図上段中。坂本2008：中期中葉の甕。）。型式の理解をめぐる問題については、在地の土器様相の把握という課題もあわせいずれ別稿で論じたい。

⑷ 第５図の岩脇遺跡は江の川（可愛川）流域に属するが、本稿では直線距離の近い馬洗川流域の遺跡群に含めている。

⑸ 備後北部でみられる鉢は、甕や高杯と部位の似るものが大勢を占める。甕と類似したものは、口縁部などの細部形態、文様構成が甕と共有されており、共通の製作方法をとりながら、製作の途中で鉢形の器

形へと派生するものであることが想定できる。

挿図出典

第１・４・５・７・８・11図　筆者作成。

第２図　広島県立歴史民俗資料館蔵、筆者撮影。

第３図　潮見1964。

第６図　藤田編1988（Bc：第16図39）・伊藤・椿編1994（E：第30図１）・松井ほか編1999（Ca：第６図５、Dc：第10図11、Fa：第197図７）・新祖ほか2003（Aa：第79図25）より一部改変、筆者作成。

第９図　伊藤・椿編1994（内面の稜が鋭い：左：第30図７・右：第31図８）、落田編1996（内面の稜が鈍い：右：18頁右下）、石井・岡野編2003（内面の稜が鈍い：左：第115図423）。

第10図　潮見1964（１類：36、３類：37）・松井ほか編1999（４類：第118図１）・稲垣・今西編2004（２類：第29図11）より一部改変、筆者作成。

第12図　増田2003。

第13図　植田1999に加筆。

図版出典

１・３・４：広島県立埋蔵文化財センター蔵、筆者撮影。２・６・７：庄原市教育委員会蔵、筆者撮影。５・８：広島県立歴史民俗資料館蔵、筆者撮影。

引用・参考文献

荒平　悠ほか　2007　「久代東山岩陰遺跡（第24次）の調査」『広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXI、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室、17～32頁。

石井哲之・岡野克巳編　2003　『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅵ、広島県埋蔵文化財調査センター。

石井哲之・刎本英博　2003　「まとめ」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（Ⅵ）、広島県埋蔵文化財調査センター、273～288頁。

石田爲成　2013　「山陰地方における塩町甕の分布について」『立命館大学考古学論集』Ⅵ、立命館大学考古学論集刊行会、123～130頁。

井藤暁子　1986　「突帯紋」『弥生文化の研究』３、雄山閣、100～104頁。

伊藤公一・椿不二美編　1994　『竜王堂遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター。

伊藤　実　1992　「備後地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社、155～238頁。

伊藤　実　2004　「弥生時代」『三次市史』Ⅰ、三次市、63～205頁。

伊藤　実　2005　「四隅突出型墳丘墓と塩町式土器 －四隅突出の思想とその背景－」『考古論集－川越哲志先生退官記念論文集－』川越哲志先生退官記念事業会、375～398頁。

稲垣寿彦編　2001　『和田原Ｃ地点遺跡発掘調査報告書』庄原市教育委員会。

稲垣寿彦・今西隆行編　2002　『割谷遺跡発掘調査報告書』庄原市教育委員会。

稲垣寿彦・今西隆行編　2004　『和田原Ｅ地点遺跡・小和田横穴墓』庄原市教育委員会。

今西隆行編　2008　『大仙２号遺跡』広島県庄原市教育委員会。

今西隆行編　2009　『小和田遺跡』広島県庄原市教育委員会。

植田千佳穂　1999　「土器からみた地域性」『研究輯録』Ⅸ、広島県埋蔵文化財調査センター、133～148頁。

梅本健治編　1984　『岡田山第３号古墳発掘調査報告』広島県埋蔵文化財調査センター。

梅本健治編　1997　『梶平塚第２号古墳発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター。

梅本健治編　2013 『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』29、広島県教育事業団。
沖元美稚子編　1999 『宮山２号遺跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター。
尾崎光伸編　2013 『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』24、広島県教育事業団。
落田正弘編　1996 『陣山遺跡』三次市教育委員会。
鍛治益生編　2003 『布掛遺跡・大仙１号遺跡・大仙２号遺跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター。
加藤　謙・桑原隆博・山田繁樹　1985 「備後北部地域」『広島県の弥生土器』広島県立歴史民俗資料館、6～10頁。
加藤光臣　2011 「稲荷山Ｄ-16号古墳の測量報告」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第８集、広島県立歴史民俗資料館、34～53頁。
加藤光臣ほか　1985 『広島県の弥生土器』広島県立歴史民俗資料館。
川﨑真二編　2013 『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』27、広島県教育事業団。
桑原隆博　1988 「原始・古代編」『吉舎町史』上巻、吉舎町教育委員会、1～65頁。
小林伸二・片岡由起子・青山　透編　2003 『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅶ、広島県埋蔵文化財調査センター。
佐伯博司編　1987 『皇渡古墳発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター。
坂本豊治　2008 「出雲平野における凹線文導入期の土器とその背景」『地域・文化の考古学 －下條信行先生退任記念論文集－』下條信行先生退任記念事業会、79～98頁。
佐々木直彦編　1982 『西山・小和田・永宗』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター。
沢元保夫・平林　工編　1984 『隠地上組遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター。
沢元保夫編　2004 『宮脇遺跡発掘調査報告書』広島県教育事業団。
潮見　浩　1964 「山陽地方Ⅰ」『弥生式土器集成』Ⅰ、東京堂、44～46頁、Pl.33・34。
潮見　浩　1996 「弥生時代」『東城町史』自然環境・考古・民俗資料編、東城町、99～144頁。
潮見　浩編　1980 『犬塚古墳群発掘調査報告書』犬塚古墳群発掘調査団。
嶋田　滋編　1981 『上山手廃寺発掘調査概報』３、広島県教育委員会。
新祖隆太郎ほか　2003 『杉谷遺跡群』三良坂町教育委員会。
妹尾周三　1992 「注口付きの脚台付鉢形土器について」『古代吉備』第14集、古代吉備研究会、95～115頁。
妹尾周三編　1987 『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター。
高島忠平　1977 「甕棺の編年」『立岩遺跡』河出書房新社、158～170頁。
竹村　崇・荒平　悠・岩崎佳奈　2007 「久代東山岩陰遺跡出土の弥生土器」『広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXI、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室、63～70頁。
長友朋子　2001 「弥生時代の土器地域色とその性格」『古代学研究』153号、古代学研究会、16～26頁。
長友朋子　2003 「文様の地域色 －弥生時代中期における凹線文を素材として－」『古文化談叢』第49集、九州古文化研究会、1～16頁。
長友朋子　2013 『弥生時代土器生産の展開』六一書房。
長友朋子　2015 「弥生土器の象徴性」『弥生土器』考古調査ハンドブック12、ニューサイエンス社、54～56頁。
中村芳昭ほか　2018 『岩脇遺跡発掘調査・岩脇古墳群測量調査報告書』三次市教育委員会。
禰冝田佳男　2019 「「境界」に位置する青谷上寺地遺跡」『白兎のクニへ－発掘された因幡のあけぼの－』大阪府立弥生文化博物館図録67、大阪府立弥生文化博物館、74～87頁。
野島　永編　2016 『佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告書』調査編１、広島大学大学院文学研究科考古学研究室・庄原市教育委員会。
原田隆雄編　1980 『重岡山遺跡発掘調査報告』重岡山遺跡発掘調査団。
桧垣栄次　1978 「大原１号遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』１、広島県教育委員会、9～35頁。

深澤芳樹　1986 「弥生時代の近畿」『文化と地域性』岩波講座日本考古学５、岩波書店、157～186頁。
藤岡謙二郎編　1972 『過疎化の進む内陸盆地と河谷地域 －三次盆地と江川流域の過去と現在－』大明堂。
藤田広幸編　1988 『和田原遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター。
真木大空　2017 「弥生時代中四国地方における注口付きの脚台付鉢形土器」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第９号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、1～24頁。
正岡睦夫・松本岩雄編　1992 『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社。
増田浩太　2003 「垣ノ内遺跡」『家の後Ⅰ遺跡・垣ノ内遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２、国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会、44～313頁。
松井和幸編　1987 『戸の丸山製鉄遺跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター。
松井和幸ほか編　1999 『和田原Ｄ地点遺跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター。
松崎壽和・潮見　浩　1955 「古代農村の復元 －広島県三次盆地を中心として－」『廣島の農村』大学人会研究論集第２集、広島県教職員組合事務部、13～24頁。
松崎壽和・潮見　浩　1961 「先史時代の広島地方」『新修広島市史』第１巻総説編、広島市役所、114～224頁。
松村昌彦　1979 「戸宇大仙山遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』２、広島県教育委員会、41～90頁。
道上康仁編　1987 『大判・上定・殿山』広島県埋蔵文化財調査センター。
向田裕始編　1980 『下山遺跡群発掘調査報告』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター。
湯村　功編　2002 『青谷上寺地遺跡』４、鳥取県教育文化財団調査報告書74、鳥取県教育文化財団。
和田麻衣子　2016 「弥生中期後半における備後北部の土器について」『島根考古学会誌』第33集、島根考古学会、15～25頁。

Regional Variations Among Pot-shaped Earthenware in the Northern Region of Bingo

Susumu MURATA

It is generally assumed that regional variations among earthenware from the latter third of the Middle Yayoi period onwards are becoming more distinctive in Hiroshima prefecture. Earthenware of the “Shiomachi type”, referred to as highly decorated, has also been unearthed in the northern part of Bingo (the eastern part of Hiroshima prefecture). In this study, I examined the difference of patterns found among wide-mouthed pots with bellied body (*kame*) from those areas. As a result, regional differences between patterns found in the Basen River basin and Saijō River basin, specifically regarding decorative combinations and pot shapes were revealed. These differences likely exist due to the different manufacturing techniques of the pots used in each area, particularly based on observations such as brush marks (*hakeme*) surface finishing and clay-joint marks in cross-sections. In general, manufacturers applied patterns on pottery to achieve visual effects in the course of usage. However, we should also consider the possibility that such applications on the surface were placed on items to denote the manufacturing process. And of course it needs to be examined why different decorations were applied on pottery based on observations of the actual materials from each region.

付表　分析対象資料一覧

資料番号	流域	市町村	分布番号	遺跡名	掲載番号	肩部文様	A類肩部凹線条数	胴部文様	頸部形態	肩部形態	文献
1	馬洗川	三次市	1	岩脇遺跡	5図4	A	4	b	鈍	1	中村ほか2018
2	馬洗川	三次市	1	岩脇遺跡	5図11	A	4	－	－	－	中村ほか2018
3	馬洗川	三次市	1	岩脇遺跡	5図12	A	3	－	－	－	中村ほか2018
4	馬洗川	三次市	1	岩脇遺跡	5図13	F	－	－	鈍	4	中村ほか2018
5	馬洗川	三次市	1	岩脇遺跡	5図14	A	3	－	鋭	2	中村ほか2018
6	馬洗川	三次市	1	岩脇遺跡	10図25	F	－	－	鈍	3	中村ほか2018
7	馬洗川	三次市	1	岩脇遺跡	10図27	A	4	a	鈍	3	中村ほか2018
8	馬洗川	三次市	1	岩脇遺跡	10図31	A	3	－	－	2	中村ほか2018
9	馬洗川	三次市	1	岩脇遺跡	10図34	A	－	－	－	－	中村ほか2018
10	馬洗川	三次市	1	岩脇遺跡	10図36	A	3	－	鈍	2	中村ほか2018
11	馬洗川	三次市	1	岩脇遺跡	10図37	A	3	－	鋭	2	中村ほか2018
12	馬洗川	三次市	1	岩脇遺跡	10図39	A	3	－	鈍	2	中村ほか2018
13	馬洗川	三次市	2	陣山２号墓	15頁右上	A	3	b	鈍	1	落田編1996
14	馬洗川	三次市	2	陣山３号墓	18頁右下	A	5	b	鈍	1	落田編1996
15	馬洗川	三次市	2	陣山４号墓	21頁下	A	6	b	鋭	3	落田編1996
16	馬洗川	三次市	2	陣山５号墓	24頁右上	A	6	b	鈍	2	落田編1996
17	馬洗川	三次市	3	上山手廃寺	10図2	A	2	－	鈍	2	嶋田編1981
18	馬洗川	三次市	3	上山手廃寺	10図3	F	－	－	鈍	2	嶋田編1981
19	馬洗川	三次市	4	宮の本遺跡	139図728	A	3	－	鈍	3	梅本編2013
20	馬洗川	三次市	5	塩町遺跡	33	A	5	d	鋭	4	潮見1964
21	馬洗川	三次市	5	塩町遺跡	36	A	6	b	鈍	1	潮見1964
22	馬洗川	三次市	5	塩町遺跡	37	A	4	b	鋭	3	潮見1964
23	馬洗川	三次市	5	塩町遺跡	38	F	－	b	鈍	2	潮見1964
24	馬洗川	三次市	5	塩町遺跡	39	A	4	d	鋭	3	潮見1964
25	馬洗川	三次市	5	塩町遺跡	47図1	A	5	b	鈍	4	松崎・潮見1961
26	馬洗川	三次市	5	塩町遺跡	3図4	A	4	－	鋭	1	向田編1980
27	馬洗川	三次市	5	塩町遺跡	2図	A	5	－	鋭	1	原田編1980
28	馬洗川	三次市	6	殿山38号墓	49図1	A	4	d	鋭	1	道上編1987
29	馬洗川	三次市	7	岡田山第３号古墳	11図3	F	－	－	鋭	2	梅本編1984
30	馬洗川	三次市	8	反遺跡	2図1	A	－	－	鋭	1	加藤2011
31	馬洗川	三次市	9	皇渡遺跡	1図上	A	4	－	鋭	3	佐伯編1987
32	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	51図248	F	－	－	鋭	3	石井・岡野編2003
33	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	115図422	A	4	－	鈍	1	石井・岡野編2003
34	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	115図423	A	5	a	鈍	3	石井・岡野編2003
35	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	115図424	A	4	a	鋭	4	石井・岡野編2003
36	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	115図425	A	－	－	鈍	1	石井・岡野編2003
37	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	115図426	A	4	a	鈍	1	石井・岡野編2003
38	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	115図427	F	－	a	鋭	4	石井・岡野編2003
39	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	115図429	D	－	－	鋭	4	石井・岡野編2003
40	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	115図431	A	－	－	鈍	1	石井・岡野編2003
41	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	115図432	F	－	－	鈍	1	石井・岡野編2003
42	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	222図566	A	5	－	鋭	3	石井・岡野編2003
43	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	222図567	A	4	－	鈍	3	石井・岡野編2003
44	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	222図570	A	2	a	鈍	3	石井・岡野編2003
45	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	222図571	A	3	－	鋭	1	石井・岡野編2003
46	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	222図573	F	－	－	鈍	3	石井・岡野編2003
47	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	222図574	C	－	－	鈍	3	石井・岡野編2003
48	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	222図575	A	4	a	鈍	3	石井・岡野編2003
49	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	223図576	A	4	a	鈍	1	石井・岡野編2003
50	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	223図577	A	4	b	鋭	1	石井・岡野編2003
51	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	223図578	A	4	b	鋭	2	石井・岡野編2003
52	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	223図579	A	3	a	鋭	4	石井・岡野編2003
53	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	224図580	A	3	a	鋭	2	石井・岡野編2003
54	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	224図582	A	4	b	鋭	4	石井・岡野編2003
55	馬洗川	三次市	10	大谷遺跡	225図584	F	－	b	鈍	4	石井・岡野編2003
56	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	117図7	A	4	－	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
57	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	118図35	A	－	－	鋭	－	小林・片岡・青山編2003
58	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	118図37	A	6	e	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
59	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	119図42	A	4	－	鋭	2	小林・片岡・青山編2003
60	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	119図43	A	－	－	鈍	－	小林・片岡・青山編2003
61	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	122図115.	E	4	－	鈍	3	小林・片岡・青山編2003
62	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	123図126	B	－	－	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
63	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	123図129	A	4	－	鈍	1	小林・片岡・青山編2003
64	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	125図162	F	－	－	鈍	3	小林・片岡・青山編2003
65	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	128図175	A	－	－	鈍	－	小林・片岡・青山編2003
66	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	128図187	A	3	－	鋭	1	小林・片岡・青山編2003
67	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	129図204	E	3	－	鈍	1	小林・片岡・青山編2003
68	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	130図210	A	3	a	鋭	4	小林・片岡・青山編2003
69	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	130図214	A	6	a	鈍	2	小林・片岡・青山編2003
70	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	130図215	A	3	－	鈍	3	小林・片岡・青山編2003
71	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	130図217	A	4	－	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
72	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	130図218	A	4	－	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
73	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	132図252	A	3	－	鈍	2	小林・片岡・青山編2003

資料番号	流域	市町村	分布番号	遺跡名	掲載番号	肩部文様	A類肩部凹線条数	胴部文様	頸部形態	肩部形態	文献
74	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	132図253	A	4	a	鈍	2	小林・片岡・青山編2003
75	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	133図254	B	－	a	鋭	2	小林・片岡・青山編2003
76	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	133図255	A	3	a	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
77	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	133図256	E	2	a	鋭	2	小林・片岡・青山編2003
78	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	134図259	F	－	a	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
79	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	134図260	A	3	e	鈍	2	小林・片岡・青山編2003
80	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	134図262	A	4	a	鈍	2	小林・片岡・青山編2003
81	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	134図263	C	－	e	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
82	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	134図264	A	4	－	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
83	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	134図265	A	3	－	鈍	3	小林・片岡・青山編2003
84	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	134図266	D	－	－	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
85	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	134図268	刻目突帯	2	－	鋭	2	小林・片岡・青山編2003
86	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	135図270	A	4	－	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
87	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	135図271	F	－	－	鈍	2	小林・片岡・青山編2003
88	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	135図273	A	4	－	鋭	2	小林・片岡・青山編2003
89	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	135図274	F	－	－	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
90	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	135図280	A	4	d	鈍	2	小林・片岡・青山編2003
91	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	138図306	F	－	－	鈍	3	小林・片岡・青山編2003
92	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	142図353	A	5	c	鋭	4	小林・片岡・青山編2003
93	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	142図354	A	6	b	鋭	2	小林・片岡・青山編2003
94	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	142図355	A	6	a	鈍	1	小林・片岡・青山編2003
95	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	142図356	A	4	a	鈍	2	小林・片岡・青山編2003
96	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	143図357	A	7	e	鋭	1	小林・片岡・青山編2003
97	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	143図358	A	3	－	鈍	2	小林・片岡・青山編2003
98	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	143図364	A	－	－	鈍	－	小林・片岡・青山編2003
99	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	143図367	A	3	－	鈍	3	小林・片岡・青山編2003
100	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	143図368	A	4	－	鈍	3	小林・片岡・青山編2003
101	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	143図369	D	－	－	鈍	－	小林・片岡・青山編2003
102	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	145図377	A	5	－	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
103	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	145図379	A	3	b	鋭	4	小林・片岡・青山編2003
104	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	145図380	F	－	－	鋭	2	小林・片岡・青山編2003
105	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	146図382	E	5	－	鈍	－	小林・片岡・青山編2003
106	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	146図389	A	2	a	鈍	3	小林・片岡・青山編2003
107	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	146図390	A	4	－	鈍	3	小林・片岡・青山編2003
108	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	147図394	A	4	a	鈍	2	小林・片岡・青山編2003
109	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	147図395	A	5	b	鋭	2	小林・片岡・青山編2003
110	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	147図397	A	3	a	鈍	3	小林・片岡・青山編2003
111	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	147図398	A	7	a	鋭	4	小林・片岡・青山編2003
112	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	147図399	C	－	－	鈍	3	小林・片岡・青山編2003
113	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	147図400	A	3	－	鈍	2	小林・片岡・青山編2003
114	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	147図401	A	4	e	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
115	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	147図402	A	6	d	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
116	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	147図405	A	3	－	鋭	2	小林・片岡・青山編2003
117	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	148図411	F	－	－	鈍	3	小林・片岡・青山編2003
118	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	149図425	A	3	a	鈍	3	小林・片岡・青山編2003
119	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	149図426	A	3	a	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
120	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	149図431	A	5	b	－	2	小林・片岡・青山編2003
121	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	150図434	A	5	d	鈍	3	小林・片岡・青山編2003
122	馬洗川	三次市	11	土森遺跡	150図443	F	－	－	鋭	3	小林・片岡・青山編2003
123	馬洗川	三次市	12	杉谷Ｃ地点遺跡	77図3	A	5	－	鈍	3	新祖ほか2003
124	馬洗川	三次市	12	杉谷Ｃ地点遺跡	79図24	A	4	－	鈍	2	新祖ほか2003
125	馬洗川	三次市	12	杉谷Ｃ地点遺跡	79図25	A	4	a	鈍	3	新祖ほか2003
126	馬洗川	三次市	12	杉谷Ｃ地点遺跡	79図26	A	3	a	鈍	3	新祖ほか2003
127	馬洗川	三次市	13	徳市遺跡	24頁右上	F	－	－	鋭	2	桑原1988
128	馬洗川	三次市	13	徳市遺跡	24頁左上	頸部粘土紐	－	－	鋭	－	桑原1988
129	馬洗川	三次市	13	徳市遺跡	24頁中	A	5	－	－	3	桑原1988
130	馬洗川	庄原市	14	竜王堂遺跡	30図1	E	－	－	鈍	3	伊藤・椿編1994
131	馬洗川	庄原市	14	竜王堂遺跡	30図4	C	－	－	鋭	3	伊藤・椿編1994
132	馬洗川	庄原市	14	竜王堂遺跡	30図6	A	3	－	鋭	3	伊藤・椿編1994
133	馬洗川	庄原市	14	竜王堂遺跡	30図7	C	2	b	鋭	3	伊藤・椿編1994
134	馬洗川	庄原市	14	竜王堂遺跡	31図8	C	2	b	鋭	3	伊藤・椿編1994
135	馬洗川	庄原市	14	竜王堂遺跡	32図14	C	1	－	鈍	3	伊藤・椿編1994
136	馬洗川	庄原市	14	竜王堂遺跡	32図15	A	3	－	鋭	3	伊藤・椿編1994
137	馬洗川	庄原市	14	竜王堂遺跡	32図16	A	5	b	鋭	3	伊藤・椿編1994
138	馬洗川	庄原市	14	竜王堂遺跡	32図20	F	－	－	鋭	3	伊藤・椿編1994
139	馬洗川	庄原市	15	隠地上組遺跡	12図2	刻目突帯	－	－	鈍	－	沢元・平林編1984
140	馬洗川	庄原市	15	隠地上組遺跡	36図1	A	4	－	鈍	2	沢元・平林編1984
141	馬洗川	庄原市	16	大原１号遺跡	1-5図2	D	－	－	－	4	桧垣1978
142	馬洗川	庄原市	16	大原１号遺跡	1-5図3	D	－	－	鈍	1	桧垣1978
143	馬洗川	庄原市	16	大原１号遺跡	1-9図1	D	－	e	鋭	4	桧垣1978
144	馬洗川	庄原市	16	大原１号遺跡	1-10図1	F	－	e	鈍	3	桧垣1978
145	馬洗川	庄原市	16	大原１号遺跡	1-10図2	A	4	－	－	3	桧垣1978
146	馬洗川	庄原市	16	大原１号遺跡	1-10図3	F	－	a	－	4	桧垣1978
147	馬洗川	庄原市	16	大原１号遺跡	1-14図2	A	5	d	鋭	1	桧垣1978
148	馬洗川	庄原市	16	大原１号遺跡	1-14図3	A	3	－	鋭	2	桧垣1978
149	馬洗川	庄原市	16	大原１号遺跡	1-14図4	A	－	－	鈍	3	桧垣1978
150	馬洗川	庄原市	16	大原１号遺跡	1-14図5	A	3	－	鋭	2	桧垣1978

資料番号	流域	市町村	分布番号	遺跡名	掲載番号	肩部文様	A類肩部凹線条数	胴部文様	頸部形態	肩部形態	文献
151	馬洗川	庄原市	16	大原１号遺跡	1-14図6	A	4	－	鋭	3	桧垣1978
152	馬洗川	庄原市	16	大原１号遺跡	1-14図8	F	－	－	鋭	3	桧垣1978
153	馬洗川	庄原市	16	大原１号遺跡	1-15図1	A	5	－	－	－	桧垣1978
154	馬洗川	庄原市	16	大原１号遺跡	1-15図2	A	4	－	－	3	桧垣1978
155	馬洗川	庄原市	16	大原１号遺跡	1-15図3	A	4	－	－	2	桧垣1978
156	西城川	庄原市	17	馬ヶ段遺跡	31図64	A	4	－	鋭	2	川﨑編2013
157	西城川	庄原市	18	原畑遺跡	54図139	A	－	－	鈍	－	尾﨑編2013
158	西城川	庄原市	19	戸の丸山遺跡	24図1	A	3	－	鋭	3	松井編1987
159	西城川	庄原市	19	戸の丸山遺跡	24図2	A	3	c	鈍	2	松井編1987
160	西城川	庄原市	19	戸の丸山遺跡	24図3	A	4	－	鋭	3	松井編1987
161	西城川	庄原市	20	割谷遺跡	51図104	A	3	－	－	3	稲垣・今西編2002
162	西城川	庄原市	20	割谷遺跡	53図162	F	－	－	鈍	2	稲垣・今西編2002
163	西城川	庄原市	21	宮山２号遺跡	5図1	F	－	－	鋭	3	沖元編1999
164	西城川	庄原市	21	宮山２号遺跡	5図6	A	－	－	鋭	3	沖元編1999
165	西城川	庄原市	22	小和田遺跡	43図33	B	－	－	鋭	－	今西編2009
166	西城川	庄原市	22	小和田遺跡	43図34	A	4	a	鋭	4	今西編2009
167	西城川	庄原市	22	小和田遺跡	49図151	A	3	－	鋭	1	今西編2009
168	西城川	庄原市	23	西山遺跡	11図1	F	－	－	鈍	3	佐々木編1982
169	西城川	庄原市	24	和田原Ａ地点遺跡	8図4	D	－	－	鋭	－	藤田編1988
170	西城川	庄原市	24	和田原Ａ地点遺跡	8図5	A	－	－	鋭	3	藤田編1988
171	西城川	庄原市	24	和田原Ａ地点遺跡	9図13	E	－	－	鈍	－	藤田編1988
172	西城川	庄原市	24	和田原Ａ地点遺跡	9図14	A	3	－	鋭	3	藤田編1988
173	西城川	庄原市	24	和田原Ａ地点遺跡	9図15	A	－	－	鈍	3	藤田編1988
174	西城川	庄原市	24	和田原Ａ地点遺跡	9図16	F	－	－	鈍	－	藤田編1988
175	西城川	庄原市	24	和田原Ａ地点遺跡	9図17	A	5	c	鈍	3	藤田編1988
176	西城川	庄原市	24	和田原Ｂ地点遺跡	16図34	A	3	－	鋭	3	藤田編1988
177	西城川	庄原市	24	和田原Ｂ地点遺跡	16図35	A	－	－	鋭	3	藤田編1988
178	西城川	庄原市	24	和田原Ｂ地点遺跡	16図37	B	－	－	鋭	4	藤田編1988
179	西城川	庄原市	24	和田原Ｂ地点遺跡	16図38	A	5	－	－	4	藤田編1988
180	西城川	庄原市	24	和田原Ｂ地点遺跡	16図39	B	1	c	鋭	2	藤田編1988
181	西城川	庄原市	24	和田原Ｂ地点遺跡	17図49	A	3	c	鋭	4	藤田編1988
182	西城川	庄原市	24	和田原Ｂ地点遺跡	17図50	C	－	c	鈍	1	藤田編1988
183	西城川	庄原市	24	和田原Ｂ地点遺跡	17図51	A	3	c	鋭	3	藤田編1988
184	西城川	庄原市	24	和田原Ｂ地点遺跡	17図53	F	－	a	鋭	4	藤田編1988
185	西城川	庄原市	24	和田原Ｂ地点遺跡	18図55	A	4	－	鋭	2	藤田編1988
186	西城川	庄原市	24	和田原Ｂ地点遺跡	18図57	A	3	－	鋭	3	藤田編1988
187	西城川	庄原市	24	和田原Ｃ地点遺跡	7図6	F	－	a	鋭	4	稲垣編2001
188	西城川	庄原市	24	和田原Ｃ地点遺跡	9図8	E	1	e	鈍	3	稲垣編2001
189	西城川	庄原市	24	和田原Ｃ地点遺跡	9図10	A	3	e	－	2	稲垣編2001
190	西城川	庄原市	24	和田原Ｃ地点遺跡	11図13	A	3	－	鋭	1	稲垣編2001
191	西城川	庄原市	24	和田原Ｃ地点遺跡	11図15	A	3	a	鋭	3	稲垣編2001
192	西城川	庄原市	24	和田原Ｃ地点遺跡	14図21	A	4	－	鈍	3	稲垣編2001
193	西城川	庄原市	24	和田原Ｃ地点遺跡	18図35	A	4	－	鋭	3	稲垣編2001
194	西城川	庄原市	24	和田原Ｃ地点遺跡	18図36	F	－	－	鈍	－	稲垣編2001
195	西城川	庄原市	24	和田原Ｃ地点遺跡	18図37	A	3	－	鋭	3	稲垣編2001
196	西城川	庄原市	24	和田原Ｃ地点遺跡	18図39	A	4	－	鈍	3	稲垣編2001
197	西城川	庄原市	24	和田原Ｃ地点遺跡	18図43	A	3	a	－	2	稲垣編2001
198	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	6図5	C	2	a	鈍	1	松井ほか編1999
199	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	6図6	A	－	－	鋭	3	松井ほか編1999
200	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	9図1	C	2	e	鈍	3	松井ほか編1999
201	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	9図5	D	－	－	鋭	4	松井ほか編1999
202	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	10図10	A	3	c	鋭	4	松井ほか編1999
203	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	10図11	D	－	c	鋭	4	松井ほか編1999
204	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	12図1	A	3	c	鋭	3	松井ほか編1999
205	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	45図17	F	－	－	鋭	－	松井ほか編1999
206	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	45図18	D	－	－	鈍	1	松井ほか編1999
207	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	51図4	C	－	－	鋭	3	松井ほか編1999
208	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	51図5	A	－	－	鈍	2	松井ほか編1999
209	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	51図9	F	－	－	鋭	3	松井ほか編1999
210	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	51図10	F	－	－	鋭	3	松井ほか編1999
211	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	52図24	A	4	－	鋭	4	松井ほか編1999
212	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	52図25	A	－	－	鈍	－	松井ほか編1999
213	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	52図32	A	3	a	鈍	3	松井ほか編1999
214	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	52図33	A	4	e	鈍	1	松井ほか編1999
215	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	52図34	A	5	－	鋭	2	松井ほか編1999
216	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	52図35	F	－	e	鈍	1	松井ほか編1999
217	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	52図37	A	3	－	鈍	1	松井ほか編1999
218	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	52図38	D	－	－	鋭	3	松井ほか編1999
219	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	53図41	F	－	－	鈍	－	松井ほか編1999
220	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	53図42	F	－	－	鋭	－	松井ほか編1999
221	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	53図43	F	－	－	鈍	1	松井ほか編1999
222	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	53図44	A	－	－	鋭	3	松井ほか編1999
223	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	59図2	C	1	－	鋭	3	松井ほか編1999
224	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	76図18	A	－	－	－	－	松井ほか編1999
225	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	80図7	A	－	－	鈍	4	松井ほか編1999
226	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	80図9	F	－	－	鋭	2	松井ほか編1999
227	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	80図12	A	－	－	鈍	1	松井ほか編1999

資料番号	流域	市町村	分布番号	遺跡名	掲載番号	肩部文様	Ａ類肩部凹線条数	胴部文様	頸部形態	肩部形態	文献
228	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	85図8	A	5	－	鈍	3	松井ほか編1999
229	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	92図1	A	4	d	鈍	2	松井ほか編1999
230	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	92図2	A	4	－	－	－	松井ほか編1999
231	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	92図4	A	4	－	鋭	2	松井ほか編1999
232	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	92図5	A	3	－	鋭	3	松井ほか編1999
233	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	96図1	A	3	－	鋭	1	松井ほか編1999
234	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	96図3	A	3	c	鋭	3	松井ほか編1999
235	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	100図6	A	3	a	鋭	3	松井ほか編1999
236	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	100図7	D	－	－	鋭	1	松井ほか編1999
237	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	103図1	F	－	－	鋭	2	松井ほか編1999
238	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	104図3	D	－	－	鋭	3	松井ほか編1999
239	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	118図1	F	－	a	鋭	4	松井ほか編1999
240	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	176図1	A	3	－	鈍	3	松井ほか編1999
241	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	177図1	A	3	－	鈍	3	松井ほか編1999
242	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	177図7	A	4	d	鈍	2	松井ほか編1999
243	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	194図1	B	2	－	鋭	3	松井ほか編1999
244	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	195図2	C	2	－	鋭	2	松井ほか編1999
245	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	195図3	A	3	c	鋭	3	松井ほか編1999
246	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	195図4	A	4	－	鋭	3	松井ほか編1999
247	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	197図1	A	6	e	鈍	3	松井ほか編1999
248	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	197図7	F	－	a	鋭	3	松井ほか編1999
249	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	197図8	A	3	c	鈍	3	松井ほか編1999
250	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	225図2	C	－	－	鋭	3	松井ほか編1999
251	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	225図3	A	－	－	鋭	2	松井ほか編1999
252	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	255図9	F	－	－	鋭	3	松井ほか編1999
253	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	255図10	F	－	e	鋭	3	松井ほか編1999
254	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	255図12	A	7	－	鋭	3	松井ほか編1999
255	西城川	庄原市	24	和田原Ｄ地点遺跡	255図13	A	4	－	鈍	3	松井ほか編1999
256	西城川	庄原市	24	和田原Ｅ地点遺跡	27図3	A	5	a	鋭	4	稲垣・今西編2004
257	西城川	庄原市	24	和田原Ｅ地点遺跡	27図4	A	6	b	鈍	2	稲垣・今西編2004
258	西城川	庄原市	24	和田原Ｅ地点遺跡	29図11	A	3	a	鈍	2	稲垣・今西編2004
259	西城川	庄原市	24	和田原Ｅ地点遺跡	29図17	A	3	－	鈍	3	稲垣・今西編2004
260	西城川	庄原市	24	和田原Ｅ地点遺跡	30図24	A	3	－	－	1	稲垣・今西編2004
261	西城川	庄原市	24	和田原Ｅ地点遺跡	30図25	A	3	－	鋭	3	稲垣・今西編2004
262	西城川	庄原市	24	和田原Ｅ地点遺跡	30図27	F	－	a	鋭	3	稲垣・今西編2004
263	西城川	庄原市	24	和田原Ｅ地点遺跡	30図28	F	－	e	鋭	2	稲垣・今西編2004
264	西城川	庄原市	24	和田原Ｅ地点遺跡	31図37	F	－	e	鋭	2	稲垣・今西編2004
265	西城川	庄原市	24	和田原Ｅ地点遺跡	31図38	B	2	e	鋭	4	稲垣・今西編2004
266	西城川	庄原市	24	和田原Ｅ地点遺跡	31図39	A	4	c	鈍	3	稲垣・今西編2004
267	西城川	庄原市	24	和田原Ｅ地点遺跡	31図43	B	2	－	鋭	－	稲垣・今西編2004
268	西城川	庄原市	24	和田原Ｅ地点遺跡	32図45	A	3	－	鋭	1	稲垣・今西編2004
269	西城川	庄原市	24	和田原Ｅ地点遺跡	32図47	A	4	－	鋭	1	稲垣・今西編2004
270	西城川	庄原市	24	和田原Ｅ地点遺跡	32図55	F	－	－	鋭	1	稲垣・今西編2004
271	西城川	庄原市	25	佐田谷１号墓	15図11	A	4	－	－	－	妹尾編1987
272	西城川	庄原市	25	佐田谷１号墓	15図15	F	－	c	－	1	妹尾編1987
273	西城川	庄原市	25	佐田谷３号墓	28図53	A	－	－	－	3	妹尾編1987
274	西城川	庄原市	25	佐田谷３号墓	28図54	A	4	－	鋭	3	妹尾編1987
275	西城川	庄原市	25	佐田峠３号墓	39図2	A	5	d	鈍	2	野島編2016
276	西城川	庄原市	25	佐田峠５号墓	43図1	A	3	－	－	4	野島編2016
277	西城川	庄原市	25	佐田峠５号墓	43図2	B	－	－	－	3	野島編2016
278	西城川	庄原市	26	宮脇遺跡	32図1	C	2	a	鈍	2	沢元編2004
279	西城川	庄原市	26	宮脇遺跡	34図14	A	3	－	鈍	2	沢元編2004
280	西城川	庄原市	26	宮脇遺跡	46図65	A	3	a	鋭	1	沢元編2004
281	西城川	庄原市	26	宮脇遺跡	46図68	F	－	a	鈍	3	沢元編2004
282	西城川	庄原市	26	宮脇遺跡	50図84	F	－	－	鈍	3	沢元編2004
283	西城川	庄原市	27	大仙２号遺跡	15図22	A	－	－	鋭	－	今西編2008
284	西城川	庄原市	27	大仙２号遺跡	15図23	D	－	－	鋭	－	今西編2008
285	西城川	庄原市	27	大仙２号遺跡	15図24	B	3	b	鋭	2	今西編2008
286	西城川	庄原市	27	大仙２号遺跡	3-5図701	A	5	a	鋭	3	鍛治編2003
287	西城川	庄原市	27	大仙２号遺跡	3-5図702	A	4	－	－	4	鍛治編2003
288	西城川	庄原市	27	大仙２号遺跡	3-5図703	A	4	－	－	3	鍛治編2003
289	西城川	庄原市	28	布掛遺跡	1-64図134	F	－	－	鈍	3	鍛治編2003
290	成羽川	庄原市	29	帝釈名越岩陰遺跡	130図4	A	4	b	鈍	2	潮見1996
291	成羽川	庄原市	30	帝釈寄倉岩陰遺跡	127図9	A	4	－	－	3	潮見1996
292	成羽川	庄原市	30	帝釈寄倉岩陰遺跡	127図18	F	－	－	鋭	4	潮見1996
293	成羽川	庄原市	30	帝釈寄倉岩陰遺跡	128図4	F	－	－	鋭	2	潮見1996
294	成羽川	庄原市	30	帝釈寄倉岩陰遺跡	128図21	F	－	－	鈍	3	潮見1996
295	成羽川	庄原市	31	梶平塚第２号古墳	21図317	頸部粘土紐	－	－	鋭	－	梅本編1997
296	成羽川	庄原市	32	犬塚遺跡	16図1	頸部粘土紐	－	－	鋭	4	潮見編1980
297	成羽川	庄原市	32	犬塚遺跡	29図1	F	－	－	鈍	2	潮見編1980
298	成羽川	庄原市	32	犬塚遺跡	29図2	F	－	e	鈍	4	潮見編1980
299	成羽川	庄原市	33	戸宇大仙山遺跡Ｄ地点	5-17図1	F	－	－	鋭	－	松村1979
300	成羽川	庄原市	33	戸宇大仙山遺跡Ｄ地点	5-17図5	A	6	－	－	3	松村1979
301	成羽川	庄原市	33	戸宇大仙山遺跡Ｄ地点	5-17図6	A	4	－	－	3	松村1979
302	成羽川	庄原市	34	若松遺跡	137図3	F	－	－	鋭	3	潮見1996
303	成羽川	庄原市	35	久代東山岩陰遺跡	14図4	頸部粘土紐	－	－	鋭	－	荒平ほか2007
304	成羽川	庄原市	35	久代東山岩陰遺跡	32図17	頸部粘土紐	－	－	鋭	3	竹村・荒平・岩崎2007

図版第１

備後北部地域第Ⅳ様式甕の製作方法を示す痕跡